韓国研修旅行を振り返って(学生レポート)

この研修旅行に参加する前まで、私は韓国に対しあまり良いイメージを持っていなかった。日本と韓国の問題がメディアで取り上げられていたり、韓国の人々は反日感情を持っていると心の中で決めつけていたからだ。だから、日本人である私たちに対し韓国の人々はどのように接して来るかが怖かった。しかし、実際に研修旅行で韓国に行き、私が感じたことは、そういった敵対的な目で見ているのは一部の人たちであり、多くの人は日本に対し興味を持ち知ろうとしてくれているという現状だった。忠南大学の学生は辞書を駆使して韓国語のわからない私たちのために一生懸命通訳をしてくれたし、趙成範先生は自宅に私たちを招いて美味しい家庭料理を振る舞ってくれた。コンビニで買い物をした時は若い店員さんが日本語で「ありがとうございます」と恥ずかしそうに言ってくれたりした。韓国滞在中の嬉しかった思い出は書ききれないくらいたくさんある。

今回、私は高校生・大学生・社会人と日本語で話しをする機会があった。高校生なのにすごく流ちょうに話ができる人がいれば、大学生でも言葉がうまく出てこなくて詰まってしまう人もいた。もちろん日本語がうまく話せればコミュニケーションが円滑にできるし、伝えたいことを思ったとおりに伝えることができる。だが、語彙や文法の正しさと同じくらい、どれだけ伝えようとしているか、という姿勢が大切なのだと私は感じた。大真大学とのプロジェクトワークで同じグループになった３人の韓国人大学生のうち、２人はそれほど日本語がうまいとは言えなかった。しかし、目を見て何を言いたいのかじっくり聞いていれば不思議と理解することができた。そしてお互い言いたいことが通じたときは本当に嬉しくて、だからこそあそこまで打ち解けられたのだと思う。大真大学の学生とは初めて会ったというよりはずっと前から友達だったような、そんな感覚を持つことができた。日本語がうまい、下手にかかわらず一生懸命に伝えようとする姿勢があったからこそあそこまで楽しく一緒に活動できたのだと私は思う。

日本語を学んでいる人々と話をする中で感じたことは、私は日本の文化について全然話ができないということだ。訪問する先々で日本や仙台についてさまざまな質問をされたが、はっきりと答えることができない場面が何度かあった。それは自分の知識に自信が持てなかったというのが一番の原因である。知識を持つということは勿論だが、コミュニケーション能力の向上が今後の私自身の課題であると感じた。恥ずかしがって気持ちを伝えないこと、考えを言わないことは時として誤解を招きかねない。理解してもらいたいと思うなら自分の考えを声に出して伝えることが大切なのだ。異文

化に触れてみて改めて私はそう感じた。また、これまでビデオや教科書でしか見たことがなかった日本語教育の現場を自分の目で見ることでたくさんのことを学ことができた。さまざまな教え方やロールプレイを体験してみて、教師も学習者も楽しそうに学んでいる様子がとても印象的だった。この研修旅行で学んだことや感じたことを生かし、人とのつながりを大切に今後も日本語教育について学んでいきたい(S・M さん)。

「韓国料理と韓国ドラマが好き！」「祖父が韓国人だからその故郷へ行ってみたい！」「海外での日本語教育を実際に見てみたい」

最初はこのような半ば軽はずみのような動機で参加を決めた韓国研修だったが、出発日が近づくにつれて、「こんな軽い気持ちで研修に参加して良いのだろうか」という思いや、3年生の参加者が3人しかいないこと、言葉の問題や日韓間の様々な問題のことなどが気になり始め、だんだん期待感よりも不安の方が大きくなっていった。
中でも4日目に待ち受けている大真大学の学生と合同で行うグループごとのインタビュープロジェクトは不安以外の何物でもなかった。

私がこのプロジェクトに大きな不安を抱いているのには2つの理由があった。1つは、プロジェクト当日に初めて会った大真大学の人たちと一緒に、松竹芸能の韓国支社の代表の方にインタビューなんてできるのだろうか。向こうの学生はどの程度日本語が話せるのだろうかと疑問を抱いていたから。

もう1つは、今年の2月に参加した名古屋研修の時に同じグループの留学生と上手くコミュニケーションをとることができず苦い経験をしたため、今回も言葉が通じてもコミュニケーションがとれないかもしれないと思ったから。

しかし、そんな不安を抱きながらも特に何の準備もできないまま研修当日を迎えた。仁川空港に到着して初めに目に飛び込んできたのは、やはり全く読めない記号のようなハングル文字だった。この瞬間、一気に「韓国に来た！」という実感が湧き、単純な私は不安に思っていたことなど全部忘れてしまった。

2日目から本格的に研修が始まり、姉妹校の忠南大学の学生や一緒にインタビュープロジェクトを行った大真大学の学生をはじめ、5日間の間にたくさんの人たちと会話をする機会があったが、その間も研修前に抱いていた不安を思い出すことはなかった。それより逆に、学生の日本語のレベルの高さや、コンビニの店員など日本語を話せる人の多さに驚かされた。

海外に来て日本語が通じることだけでも嬉しかったが、特にどこを訪問しても「この人は本当に韓国人なのだろうか」と疑問に思うほど日本語の上手い人が多く、分からない言葉があっても簡単な英語やジェスチャーを用いたり、紙に絵を描いたり、日本語が得意な他の人に聞いたりするなどして、積極的に日本語で話してくれたことが嬉しかった。

また、忠南大学の会話パートナーとなった3年生のアギョンや、一番心配していた大真大学のインタビューグループの4年生アルムとソネ、2年生のスビンとサンヒョが昔から友達だったかのように接してくれ、一日がとても早く感じるほど楽しかった。もちろん、インタビューも無事に終えることができた。

しかし、仲良くなれたからこそ後悔したこともあった。

日本語教育の研修だから、韓国語が分からなくても向こうの学生が日本語で話してくれるという考えや、日韓間の問題についての無知さが、みんなの「韓国語は全く話せ

ないの？」という言葉や「日本人に対する良いイメージが持てるきっかけになったよ。ありがとう」という言葉を聞くたびにものすごく申し訳なくなり、なんでちゃんと韓国のことについて勉強してこなかったのだろうと自分が情けなくなった。

今回の研修は、言語面だけでなく、日本語を教えるということはどういうことかという文化面についても学ぶことができた貴重な機会だったと思う。

日本に帰ってきて１０日程経った今も、韓国からたくさんの友達がメールをくれる。そのメールには必ずといっていいほど「日本語がもっと上手く話せるように勉強がんばるね！今度会ったときには日本語ペラペラになってビックリさせるからね」と書かれている。

その時までには私も韓国の友達に負けないように韓国語と韓国の文化について勉強して、みんなをビックリさせたい(S・T さん)。